

時	論
新	論
理	想
論	

# 18世紀啓蒙主義スペインとアメリカ先住民 —マラスピーナ探検隊の貢献

黒田 悦子

(くろだ えつこ)

本館名誉教授

## 探検隊と先住民の関係

最近、中米・カリブ海の先住民の歴史と現在の状況について解説を書くことになり、あちこちに知識と理解の不足を感じた。そのひとつが一八世紀ブルボン朝スペインの植民地政策に関わる個所であった。

一般的には、この王朝の重商主義政策は植民地を圧迫し先住民の反乱を誘発した、ということになっているが、スペインの脈絡から見ると、この期の啓蒙主義が先住民に益したこともあるのではないかとわたしは考えた。そこで一八世紀のスペイン史を読んでみると、この期の探検隊と先住民の関係について興味深い史実に出合った。歴史家は既にご存知かもしれないが、先住民への関心にはほつて要点をお伝えしたい。

一八世紀のスペインは、中南米の植民地をおもな対象として六〇余りの科学探検隊を派遣している。時期は一七三五～一八〇七年で、カルロス三世とカルロス四世の治世下に集中している。このなかで、規模が大きく人類学的にも興味深いのは一七八九～一七九四年のアレハンドロ・マラスピーナの探検隊である。

マラスピーナはイタリアのバルマ公爵領で貴族の息子として生まれ、当時スペイン領のシチリアで育ち、ローマで物理学を学び啓蒙思想に接した。一七七四年二〇歳でスペインに渡り、海軍に入隊し、アジアや南米への航海経験を積んだ。一七八九年、アトレビータ号とテスクビエルタ号二艘の船団の隊長としてカティス港から出発し、南米のモンテビデオに向かい(地図)、南米から中米、アラスカ、南下してパンク

パー島、カリフォルニア、メキシコのアカプルコ、そこから太平洋に出て、グアム、フィリピン、マカオ、オーストラリア、ニュージーランド、フィジー、南米と巡り、スペインに戻った。

## 植民地の独立を願う

啓蒙主義者マラスピーナと将校の、先住民への興味は植民地体制に組み込まれていない人びとにあつた。南米では、パタゴニア人とウイリチエ(マプーチエの一部)についての記録と絵が印象的である。カシーク(酋長)は威厳に満ち、子どもの姿には愛らしさと力強さが並存している。北米北西海岸のトリンキットとヌートカについ

ての絵では、表情に満ちた酋長や妻と子どもたち、カナリーに乗った大勢の人びと、平和交渉を身振り求める男たち、火葬用の積みまきと墓などが注目を集める。これらの絵と記録のほとんどは、別の探検隊による収集品と一緒にマドリッドのアメリカ博物館と海軍博物館に所蔵されている。実物を見てみたいものである。

マラスピーナは一七九四年、スペインに戻り、カルロス四世とマリア・ルイサに勞をねぎらわれ、海軍でも昇進した。しかし、彼は植民地の独立や関税と貿易制限の軽減を答申し、逮捕され七年の刑に服し、シチリアで死亡した。探検の成果は生存中には出版されず、先住民とスペインの関係の改善に貢献することもできなかった。

